

平成29年度 少年の主張 第39回「東毛地区大会」

平成29年度少年の主張第39回「東毛地区大会」が、8月19日（土）に館林市文化会館小ホールにて開催されました。

この大会は、中学生が「日頃の生活を通して感じていることや考えていること」を、自分の言葉で聴衆の前で発表することにより、社会の一員としての自覚を高めるとともに、少年に対する県民の理解や認識を深め、青少年の健全な成長を願って開催されています。

本大会に出場した19名の皆さんは、各市町の予選会等を勝ち抜いた代表として、落ち着いて力強く発表し、来場者に多くの感銘を与えてくれました。

最優秀賞に選ばれた4名の主張を掲載します。（発表順）



支えられる人に

みどり市立笠懸南中学校 三年 佐藤 梨奈

「総理大臣の命令です。町民の皆さんは直ちに避難をしてください。」

皆さんは「生まれ育った故郷と今、この瞬間に離れて」と言われたら、どうしますか？

私は、六年前の三月十一日、福島県の浪江町にいました。当時私は小学校二年生。それは小さな地震から始まりました。すぐに地震の揺れは収まるものとクラスの誰もが思っていました。しかし、揺れは収まるどころか右に左に大きく揺れ、私はクラスの友人と一斉に机の下に潜り込みました。

電気や水道などのライフラインが止まり、古い家屋は押しつぶされました。私の住んでいた浪江町は海が近かったこともあり、津波の被害も受け、家屋だけではなく多くの町民の命までも奪われました。未だに行方不明の町民もいます。

行方不明者の搜索が難航した原因は、福島第一原子力発電所周辺地域での放射線被ばくの危険性から、震災直後は大規模な搜索活動を行うことができなかったからです。

私の住んでいた浪江町に、震災の翌日の朝、放射能が漏れた事故が起きているという情報が入りました。私達はどうしているかわからず、右往左往していると、「総理大臣の命令です。町民の皆さんは直ちに避難してください。」とヘリコ

プターやパトカーで何度も避難を命令されてしまいました。

私達家族は、福島県内、静岡県、埼玉県、群馬県と一週間は泊まる場所を転々としました。八カ所目にして、みどり市に落ち着きました。避難中は、いつ家に帰れるのか、友人はどうしているのか、祖父母は大丈夫か、と毎日不安で悲しい思いに胸が締め付けられそうでした。昨日まで過ごしていた先生や友人たちと急に会えなくなり、また、当たり前のように過ごしていた生活が一変してしまい、あまりに突然の出来事に頭の中が混乱していました。

埼玉県に住む伯母の家に避難の際、数々の支援をいただき、とても感謝の気持ちでいっぱいです。ボランティアの方々には、たくさん支えてもらいました。何も言わずにただ寄り添ってくれるだけで心が安らぎました。普通に接してくれるという当たり前のことがいかにありがたいかということをしみじみと感じました。

四月からは新しい小学校に転入することになりました。当時の私は、「大変だったね。」とどんな励ましの言葉を言われて心が晴れずにいました。六年経った今も、この環境に慣れはしても、古里のことが頭の片隅にずっと残って離れないのです。

あれから六年。今では、震災や原発事故のことは風化してきているように感じます。私にはあの日のことを伝え続けなければならぬ使命を持っています。しかし、震災と津波、原発事故を体験したというのに、現実から逃げてしまってい

る自分もいるのです。使命を思い出し、この体験を伝えていけたらと考えています。

また、あのつらい日々をたくさんの人に支えられ、生活できたことに感謝し、困っている人には大丈夫？と声をかけ、つらい経験をした人にはそっと寄り添える人になりたいと思います。

今年の四月に私の古里である浪江町は、一部避難指示が解除され、浪江町に戻って生活をすることができるようになりました。しかし、医療・介護・商業施設・学校などの体制がまだ整っていません。震災前と同じような生活を営むにはまだまだ何年もかかりそうです。

震災の記憶を教訓に、今後どんな災害、いやどんな困難が待ち受けていても強く生きていきたいです。そして多くの人に支えられ、自分は生かされていることを忘れずに生きていきたいです。いつか、古里に帰る日が来るまで。

私は、私の足で生きていく。

太田市立南中学校 三年 森田 愛美

私は花の十四歳。メイクにも、流行のファッションにも興味がある、青春真つただ中のいまだき女子。友達とプールにだって行きたいし、素敵な恋愛だつてしてみたい。挙げればキリがないほどのやりたいことがある『今』を精いっぱい生きている。

今の言葉に嘘はありませんが、実際の私は少し違っています。私はこれまでの人生で、たくさんのやりたいことを飲み込んで生きてきました。例えば、かわいいスカートがあっても買うのを躊躇しますし、大人っぽいヒールの靴をはきたくても自信がありません。

私は生まれつき右足のひざ下を欠損しており、幼い頃から義足で生活しています。思い返してみても、この足のせいで挑戦できなかったことがたくさんあったように思うので、私はこの足が好きではありません。

自分が義足であるということに、明確なコンプレックスを感じた出来事といえば、小学校の水泳の授業を思い出します。義足の中に入った水を取り除こうとする私を取り囲む友達。みんなが、心の底では私のことを好奇の目で見つめていたのではないかという、不安が押し寄せました。そんな経験をしたせいもあり、私は水泳の授業を休みがちになり、洋服は足

が隠れるものを選ぶようになりました。今思えば、障害が私から奪ったものは足だけでなく、『勇氣』だったのかもしれない。

皆さんは片山真理さんという方を知っていますか？ 近年、セルフポートレートという手法の作品で注目を集めている、群馬県出身のアーティストです。驚くべきは、彼女が両足義足、左手にも障害がある中で、自分自身を題材にした作品で活躍しているということです。義足にきれいなペイントを入れて、あえて見せるという発想。わざわざパーツを取り寄せてまでハイヒールを履くという発想。自分の足の断面をあらわにするという発想。私にとっては、衝撃以外の何物でもありませんでした。

改めてじっくりと鑑賞した作品の中の彼女は、とても美しく魅力的で、その目は、自分を表現することへの覚悟と自信に満ち溢れているようでした。

中学生になった私は、演劇部で活動をしてきました。運動は苦手で、音楽や絵も不得意……。そんな裏方志望の私に、ひよんなことから役が与えられることになりました。役の名前は、篠原小春。私に似て、臆病になつている中学生。初めは、演じることの恥ずかしさばかりが頭をよぎりましたが、初舞台を終えた瞬間の達成感はとても清々しいものでした。その後も、キャストとして公演や大会を重ねていくうちに、私は表現できる喜びを感じていることに気がつきました。舞台の上では、『義足の女の子』という呪縛から解放放たれて

いるからだと思います。

幼い頃から自分の義足を隠し、さまざまなことをあきらめてきた私。自信を持って表現する『勇氣』は、義足によつて奪われたのではなく、自分自身が義足の中にしまいこんでいたのかもしれない。そんな風に考えるようになりました。

今の日本では、個性を大事にすることが求められます。では、私の足は個性ですか？私はそうは思いません。でも、この足とともに生きてきたことで『今の私』があることは確かです。例えば、義足を交換するたびに感じてきた、苦悩や喜びに似た複雑な感情の積み重ねも、悔しいけれど『私』の大切な一部なのです。

思うに個性とは、私が私の境遇の中で感じたことや考えたことの先に見えるものなのではないでしょうか。障害の有無に関わらず、自分の境遇を憂いたり、悲観したりすることは誰にでもあります。その中で、自分を納得させようと必死に葛藤する。その先にたどり着いたものが、かけがえのない個性として自らを輝かせるものになると思うのです。一度きりの人生なら、私はその個性を磨き、勇氣をもつて『私』を表現して生きていきたいのです。

まだぼんやりとした形の私の『個性』。自分を輝かせてくれるそれを見つけるために、義足に足を引っ張られるわけにはいきません。

私は、私の足で生きていく。

ペイ・フォワード

桐生市立相生中学校 三年 新井 梨羅

ここにいるみなさんは、今日が人生の最後の日だったならなにをしますか。行きたい場所に行ったり、会いたかった人と会ったり、趣味に残りの時間を費やしたり、普段通り過ごしたり、最後の時間の過ごし方は人それぞれだと思います。

「死」というものは突然です。いつ誰がどこでどのような人生を終えるかは誰も知りません。もしかしたら明日、大切な家族が、大好きな友達が、可愛がつているペットが、もしくは自分が死んでしまう可能性だってゼロではないのです。人生は永遠に続くように感じますが、いつか終わりはやつてくるのです。ニュースを見れば殺人事件や事故、火災など、悲しいニュースが次から次へと流れていく日も珍しくない世の中です。そんな状況で生きているみなさんは、なにをやるべきだと思いますか。

そこで私はここににいるみなさんに知ってもらいたい言葉があります。それは、「ペイ・フォワード」です。

ペイ・フォワードとは、自分が親切にしてもらったときに、その善意や思いやりを他の誰かに別の形で広げていくというものです。自分が思いやりを受けた時、その相手に対して感謝の意味も込めてお返しをして終わるのが一般的です。しかし、ペイ・フォワードは思いやりを受けたら、その相手で

はなく、別の人に別の形で親切にして、また親切にされた人が、別の人へ同じようにしてどんどん広げていくのです。例えば給食の時間、自分が重い食缶を持っていたら、通りかかった友達が手伝ってくれたとします。このときの感謝の気持ちを忘れずにいます。そのあと、掃除の時間、一人で大変そうにぞうきんがけをしている友達がいました。さきほどの感謝の気持ちを思い出し、ぞうきんがけを手伝ってあげます。これがペイ・フォワードです。私は小学五年生のときに、転校してきたのですが新しい学校に不安な私にたくさん友達の話しかけてくれ、不安な気持ちがなくなったことを今でも覚えています。ある日、自分の通っていたスイミングスクールに新しく入ってきた子がいきました。プールサイドで不安そうにいるその子を見て、自分が転校してきたときのことを思いだし、優しく声をかけてあげました。するとその子は、笑顔になり、私もその笑顔を見てとても嬉しくなりました。それが私の最初のペイ・フォワードでした。

日本には、約一億三千万人の人がいます。一人が三人にペイ・フォワードをしたら、三人が九人に、九人が二十七人に、二十七人が八十一人に……とどんどん広まっていき、いずれ一億三千万人も人がペイ・フォワードを体験したら、きっと思いやりあふれる素敵な国になっていくと思います。逆に自分がされて嫌なことは絶対他の人にはしないという気持ちをもって、嫌な思いや悲しませる言葉の連鎖を自分で断ち切ることができれば、人を思いやることができる、より素敵な

人間になれると思います。この負の連鎖を断ち切り、ペイ・フォワードを広めることで、ニュースを占領している悲しい事件や、いじめ問題もなくなっていくのではないのでしょうか。悲しいニュースがあふれる世の中、ただ自分のことだけを見据える一本道を歩く人生ではなく、誰もが生きていて良かったと思えるような、未来への道を歩いていく、素晴らしい人生にしませんか。

みなさん、今日が人生最後の日だったらなにをしますか。そう言われたら、私は行きたい場所に行って、その場所出会った人達に残りの時間でペイ・フォワードを広めていきたいです。なぜなら、自分の知らない街や土地でも自分がしたペイ・フォワードで色々な人と嬉しい気持ちを共有できるように感じるからです。今はネットで気持ちを共有することも多いですが、私はペイ・フォワードで共有する気持ちのほうが新鮮で心にぐつとくるものがあると思います。そして、第一に家族や友達、未来の日本のためにも、思いやりを大切にしっかりと生きることが私達のすべきことではないでしょうか。

みなさんも一緒につくりあげませんか。ペイ・フォワードでつながる思いやりあふれる人生を。

知る喜びを皆に

ぐんま国際アカデミー中部部 二年 伏島 伽耶

普段は人ごみが大嫌いな私も、この日ばかりはとてもワクワクしていました。東京・上野の国立科学博物館の大英自然史博物館展を見に行くためです。世界で十体しか発見されていない始祖鳥の化石やプラチナコガネなど教科書で見えないようなものが目の前にあり、とても興奮しました。私が最も驚いたのは、ダーウィンの著書「種の起源」の直筆原稿です。そこには書き直された跡が沢山あり、「ダーウィンも、私と同じように、沢山迷って沢山考えているんだ」と親近感が沸き、とてもうれしくなりました。ここで一つ、ダーウィンはなぜ書いて消してを繰り返していたのでしょうか。それは、自分が研究し、初めて知ったことに喜びを感じ、その喜びを的確な言葉に表現したかったからなのかもしれません。私は今、学校でいろんなことを学んでいます。エアコンが整備された明るい教室で、必要な道具がそろい先生が教えてくれる、という恵まれた環境です。わからないことがあれば、先生に聞いてすぐに答えが返ってきます。一つの言葉の意味が分かっただけで、一つの「わからない」が解けただけで、世界が広がりものの見方が変わります。何かを新しく学び知識を得るということは、とても面白いことです。

でも、世界では、誰もがこのような環境で学習している訳

ではありません。先日、テレビで発展途上国と児童労働についての番組を見ました。発展途上国で家事使用人として働く女の子たち、物品販売をしてその日の生活費を稼ぐ男の子達は、「勉強をしたい。学校に行きたい。」と黙っていてもなお、家庭の経済的貧困や親の考え方によりなかなか学ぶことはできません。そして彼らは、私たちがあたりまえのように抱いている知る喜びを知ることが難しいのです。

先日、私は沖縄へ修学旅行に行きました。そして、ひめゆりの塔と平和祈念資料館を訪れました。「ひめゆり」と呼ばれる私と同世代の女学生たちは沖縄師範学校女子部と県立第一高等女学校の学ぶことが大好きな生徒たちでした。発展途上国の子供たちとは違い、彼女たちは「知る喜び」を知っていました。ずっといろんなことを学び続けたい、そう願っていたでしょう。しかし、第二次世界大戦の沖縄の地上戦により、彼女たちは陸軍病院に看護婦として配属、勉強を続けるために壕に万年筆を持ち込んだ生徒もいましたが、そんな時間もなく、多くの方々が命を落としました。

私は何かを知ることが楽しいということを知っています。世界ではその機会を得ることができない人たちもいます。また学び続けられなかった人たちもいます。だから、私は自分の「知りたい」を沢山「知る」ことが出来、それを続けられる今の環境を大切にし、感謝していきたいと思います。そして、この喜びを世界に広めたいです。例えば、学ぶ環境が整わず学べていない人たちに文房具などを集めて届け、環境

を整える手助けをすることができます。でも、まずは自分の身近なところからでもいいので、誰かの「これ知りたい」に耳を傾けて、教える。新たな知識を得たときの相手の「そうなんだ」という気持ちを知る喜びを世界に広めるきっかけになると思います。みんなに知る喜びを。